

参加歓迎・入場無料

シンビオ講演会

## 「学習する組織」による安全文化の醸成

日 時： 平成 21 年 5 月 8 日（金） 午後 3 時～5 時

場 所： 京大会館 102 号室

（JR 京都駅より 206 系統市バス京大正門前下車，徒歩 5 分）

最近、『安全と安心の確保』が我が国の科学技術政策の重要課題となっています。そこでは社会の安心に応えるため、技術に携わる事業組織が高い使命感をもって『安全』を達成する「学習する組織」への変容の道が求められており、一方、欧米では高危険性産業の「学習する組織」研究プロジェクトが進んでいます。本講演会では、原子力組織を対象に「学習する組織」による安全文化の醸成のため、この 3 カ年間先駆的プロジェクトに取り組んだ集団力学（グループダイナミックス）とヒューマンインタフェースの研究者による文理融合型研究の成果の一端を紹介いただきます。多数の皆様のご参加をお待ちしています。

### 講演(1)：活動理論に基づく現場研究アプローチ

京都大学大学院人間・環境学研究科 教授 杉万 俊夫 氏

#### 概要：

自発的な組織学習活動の実践から成功事例を発見し、蓄積し、活用する。使命感の高い自律的組織として発展する『学習する組織』の概念モデルとその実践法を発表する。

本研究では、第 1 に、活動理論（activity theory）をベースに、「学習する組織」の概念モデルを作成した。第 2 に、原子力発電所組織（保守部門）において、3 年間にわたる現場研究を実施し、組織学習を促進する日常的活動や工夫を収集し、それを上記の概念モデルの中に位置づけ、整理した。

概念モデルでは、日常的組織活動を、業務遂行活動と業務改善活動のセットとして捉えた。その上で、「学習する組織」においては、「個人ごとの業務遂行を、コミュニケーションを通じて、協働的な業務遂行にする」業務遂行活動と、「小さな気づきを、コミュニケーションを通じて、新しいルーティンを創り出す」業務改善活動が必要であることを指摘した。さらに、従来の日常的組織活動が依って立つ暗黙自明の前提を塗り替え、新しい日常的組織活動に変換する活動である「変革活動」をも概念モデルに取り入れた。

略歴：

1974年、九州大学教育学部卒業、1979年同大学院博士課程修了。1980 - 88年、大阪大学人間科学部助手、1988年、京都大学教養部助教授、1996年、同大学総合人間学部教授、2003より同大学院人間・環境学研究科教授。1984 - 85年、フルブライト研究員。1994 - 98年、日本グループ・ダイナミックス学会会長。国際応用心理学会フェロー。

講演(2)：「学習する組織」のための内発的データベース

京都大学大学院エネルギー科学研究科 助教 石井 裕剛 氏

概要：

「学習する組織」の協同学習を支援する新たな ICT(Information and Communication Technology)研究を発表する。

学習には外発的要素と内発的要素がある。従来のお仕着せのグループウェアでは、機能や内容は豊富でも活用が進まなかった。本研究では、個々の組織要員の内発性に注目して、職場（あるいは組織）のメンバーが自らのために、自ら作成し、自ら実際に活用できるデータベースとして、内発的データベースの開発を目指してきた。内発的データベースは、利用者のデータベースに対する愛着を早期に醸成する手法、データベースの内容に関する利用者間の議論を促進する手法等を適用することにより、データベースの有効活用を促進しようとするものである。本講演では、原子力発電プラントにおけるハットヒヤリ事例をコンテンツとする内発的データベースの実現に向けて3年間進めてきた研究成果を、実際のシステムの実演を含めて紹介する。

略歴：

1996年京都大学工学部電気工学第二学科卒業。1998年同大学院工学研究科電気工学専攻修士課程修了。2000年同大学院エネルギー科学研究科博士後期課程期間短縮修了。同年京都大学大学院エネルギー科学研究科助手（後に助教）。2004年-2005年 ノルウェーエネルギー技術研究所客員研究員。博士（エネルギー科学）。ヒューマンインタフェース、特に拡張現実感の研究に従事。2007年ヒューマンインタフェース学会学術奨励賞受賞。ヒューマンインタフェース学会、日本バーチャルリアリティ学会、IEEEなどの会員。

問い合わせ・申し込み先：

準備の都合上 4月末までに参加者氏名、所属、連絡先をメールで下記にお申し込みください。

シンビオ社会研究会 事務局： 張 奇 (zhangqi@energy.kyoto-u.ac.jp)